審査の結果の要旨

氏名　　村山　航

学力テストは、学力を測定し、評価する道具としてだけでなく、学習者の動機づけや学習行動に大きな影響を与える。１章、２章における先行研究の検討を踏まえて、本研究では、「空所補充型」や「記述式」といったテスト形式に関する予期が、学習方略に与える影響を実証的に検討することを目的としている。

3 章では、中学生・高校生に対する質問紙調査から、「この学習方略はテストでよい成績をとるために有効である」という認知（テスト有効性の認知）が、方略使用と相関関係をもつことが明らかになった。4 章では、個人内の共変関係に着目しても、この知見があてはまることを、高校生に対する調査で示した。5 章では、中学生に歴史の実験授業を数日間行い、毎回の授業後に空所補充型テストを実施する群（空所補充群）では、記述式テストを実施する群（記述群）に比べて、暗記を中心とした浅い処理の学習方略が多く使用され、深い意味的処理の方略が使用されにくいことを示した。手続きを修正した６章でもその結果が再現され、テスト形式の予期が学習方略に与える影響が認められたとしている。

7 章・８章の実験では、テスト困難度の認知が高いほど、空所補充型テストにおいて浅い処理の方略使用が増大することを、相関研究と課題操作によって示した。さらに、９章では、浅い処理の方略が有効な空所補充型テストを実施した群のみならず、深い処理の方略使用が有効となるような空所補充型テストを実施した群でも浅い処理の方略使用が増加することが明らかになった。すなわち、学習者は必ずしもテストの課題要求に適合した方略変容を行っているわけではなく、「テスト形式スキーマ」ともいうべき、テスト形式に依存した信念に基づいて方略を変容させている可能性が示唆された。

こうした研究結果を踏まえて、テスト形式の予期による方略変容プロセスの仮説的モデルを提唱した。このモデルでは、学習者があるテストを難しいと認知し、その原因を方略に帰属したときに方略の変容が生じるとするが、浅い処理と深い処理のどちらの方略を使用するかの判断には、テスト形式スキーマによる調整プロセスが存在すると仮定する。10 章・11 章では、「空所補充型テストには浅い処理の方略が有効である」という信念の得点が高い学習者ほど、空所補充群で浅い処理の方略を多く使用することを明らかにした。12 章では、教示によってテスト形式スキーマに介入してその修正を図った群の学習者は、空所補充型テストで浅い処理の方略をあまり使わなくなることを示した。これらの実証的研究は、テスト形式スキーマ仮説を支持するものであると論じられた。

このように、本研究は、テスト形式が学習方略に及ぼす影響について、教育心理学的手法を用いて詳細に検討したもので、理論的に貢献するとともに、評価の役割について教育研究にも示唆を与えるものと考えられる。よって、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい論文であると評価された。